

Ⅲ 学会および誌上発表抄録

1. 学会発表

(1) 東海・近畿・北陸地方での酸性雨共同調査研究 — 冬期における酸性沈着の特徴 —

青山善幸、前川 勉

北村守次 (石川県)

鳥山成一、安念 清 (富山県)

第37回大気環境学会 (1996年、堺市)

酸性雨は広域的な現象であることから、全公研東海・近畿・北陸支部の16研究機関では、酸性雨共同調査研究会を設置し、平成元年度から自治体の枠にとらわれない広域的な調査を実施している。6年度までに得られた調査結果から、特に冬期に着目し、日本海側と太平洋側との比較を行った。

その結果、冬期における雨水のpHは、太平洋側4.6～5.1であったのに対して、日本海側は4.4～4.6とかなり低いこと、また、水素イオン沈着量が日本海側が太平洋側の3～12倍も多いことなど地域の違いによる特徴的な結果が得られた。

(2) 敦賀地域における植物環境調査について

落井 勲、久嶋鉄郎、宮永信幸、

三田村忠司 (総合グリーンセンター)

南 忠員 (農業試験場)

第23回環境保全・公害防止研究発表会

(1996年、札幌市)

昭和61年から平成7年にかけて実施した樹木活力・土壌・大気汚染物質の調査結果を報告した。

スギ、ケヤキ、スジダイ、クロマツ、ミカンの活力指数平均値は、1.00～1.27の範囲にあり、全体的にはほぼ健全な状態にあると考えられた。また、火力発電所の稼働前および稼働後の期間において活力指数平均値の差は認められなかった。

土壌分析結果と林地生産力判定の基準との比較においては、スギの生育には良好な状態にあるとはいえないことが分かった。

大気汚染物質調査結果では、SO₂、SPM、NO₂は、いずれも環境基準を下回っており、良好な状態に推移している。

(3) 水素化物発生—無炎原子吸光法による砒素、セレン、アンチモンの逐次定量法の検討

吉田耕一郎、荒井彦左エ門

第23回環境保全・公害防止研究発表会

(1996年、札幌市)

環境基準項目の追加、基準値の強化、要監視項目の設定が行われ、これらの項目の迅速かつ効率的な分析方法の開発とともに、十分な定量下限値の確保が望まれている。

の中で、河川水、海水および工場排水中の砒素、セレン、アンチモンの定量について、水素化物発生—無炎原子吸光法を用い、予備還元の方法、酸分解法を検討し、これら3元素を系統的かつ感度、精度の高い分析手順について報告した。

(4) 環境関連データによる大気汚染物質の評価図について

八幡仁志、白崎健一

全国公害研協議会東海・近畿・北陸支部研究会

(1996年、富山市)

従来から、大気汚染物質を評価する際にスプライン法によるデータ補完を行って、県下全域の汚染状況を把握してきた。しかし、この方法においては、使用する常時監視結果や簡易測定結果のデータ数が少なく、また測定データの少ないところでの評価が行えない欠点があった。

このため、大気汚染物質と環境関連データとの関係を評価し、回帰式によって県下全域の汚染状況を求めて従来のスプライン法と比較した結果について報告した。

(5) 平水時における湖沼流域の負荷量調査

片谷千恵子、村田義公

全国公害研協議会東海・近畿・北陸支部研究会

(1996年、富山市)

「湖沼水質保全対策事業」の湖沼水質シミュレーション作業の一環として、北潟湖、三方五湖 (日向湖を除く) の平水時の流入負荷について調査を実施した。

その結果、COD、T-N、T-P等の基底濃度は、農業系・山林系による違いと、流域の土壌類型・植生による違いにより大きく異なることがわかった。また、農業系の代かき・田植え時期による負荷の増大が4・5月の調査で明らかにされた。

2. 所内研究発表会

第25回環境科学センター・衛生研究所・原子力環境監視センター・食肉衛生検査所との合同の研究発表会

1. 日時 平成9年3月3日(月) 9:30～15:00

2. 場所 環境科学センター会議室

No.	発 表 演 題	発 表 者	
1	嗅覚による悪臭調査について	主 任 研究員	植 山 洋 一
2	環境情報システムの表示業務について (Windows用表示プログラムの開発)	〃	八 幡 仁 志
3	公共用水域監視データのパソコン処理	〃	坪 川 博 之
4	流域タンクモデルの改良	〃	宇都宮高栄
5	湖沼流域の負荷量調査	研究員	片谷千恵子